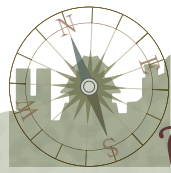


March

号外
2024過去と現在を行き来しながら、
未来を考える壁新聞上町台地
今昔タイムズ

上町台地 今昔フォーラム

*UEMACHIDAICHI*KONJAKU*TIMES
vol.19 Document発行 大阪ガスネットワーク エネルギー・文化研究所 (CEL) / 企画・編集 U-CoRoプロジェクト・ワーキング
問合せ先 tel.06-6205-3518 (担当:CEL弘本)
ホームページ <http://www.og-cel.jp/project/ucoro/index.html> ※U-CoRo=ゆーこーろ(上町台地コミュニケーション・ルーム)

上町台地 今昔フォーラム vol.19

2023年 上町台地トークライブを開催しました(会場+オンラインLIVE配信)

独創の国文・民俗学者にして歌人、
折口信夫=釋迢空の原点がここに
折口少年は大阪と
上町台地に何を見たのか

折口信夫の没後70年に当たる2023年、「上町台地 今昔タイムズ」vol.19では、彼の少年時代を中心とした、大阪・上町台地周辺の歩みをたどり、折口自身が語っている、大阪のある種の“野生”を帯びたまちのありようが、この地で生まれ育った折口の心を深く豊かに耕していたことを浮き彫りにしています。2023年の上町台地 トークライブでは、現代の大阪で人々の想いを描く歌人・高田ほのかさんをゲストに迎え、今昔タイムズvol.19で、折口信夫の原風景を読み解いていただいた、田野登さん・高橋俊郎さん・北辻稔さんを交え、折口少年のまなざしを入り口に、折口学・作品群を生んだ大阪と上町台地のコスモロジーに迫りました。

折口信夫の思想や感性を形作った風土、その軌跡を追体験することが、混沌の時代にあって、都市・大阪の再評価に向け、欠かせない視座と眺望を開く機会になることを願って開催したものです。

*「上町台地 今昔タイムズ」や関連フォーラムのドキュメント・レポートのバックナンバーは、ホームページ「大阪ガスネットワークCEL」「U-CoRo」で検索してご覧いただけます。

「上町台地 今昔タイムズ」
第19号(1面)

- 開催日時: 2023年12月10日(日) 14:00~16:30頃
- LIVE会場: 大阪ガス実験集合住宅 NEXT21 2階ホール(大阪市天王寺区清水谷町6-16)
- 開催・参加方法: 会場(参加人数限定)+オンライン(Zoom) LIVE 配信
- 出演者:
ゲストスピーカー: 高田ほのか(歌人)
パネリスト: 田野 登(大阪民俗学研究会代表)
高橋俊郎(オダサク倶楽部代表)
北辻 稔(古代史探検家)(敬称略・順不同)
司会: 弘本由香里(大阪ガスネットワーク エネルギー・文化研究所 特任研究員)
- プログラム: はじめに「没後70年、折口信夫の年譜紹介」
フォーカス「私の釋迢空アンソロジー、大阪詠で追う折口少年のまなざし」
ダイアログ(ゲストスピーカーの話題提供など)
「折口学・作品群を生んだ、大阪と上町台地のコスモロジーに迫る」
- 主催: 大阪ガスネットワーク エネルギー・文化研究所(CEL) 企画: U-CoRoプロジェクト・ワーキング



出典: 国立国会図書館「近代日本人の肖像」から

国文学と民俗学を独自の感性で結び付け、「まれびと」などの概念を生みだし、また、古代・中世の伝説に想を得て、「死者の書」や「身毒丸」など異彩を放つ小説を創作し、さらには、歌人・詩人としても大きな足跡を残した、折口信夫=釋迢空。文化の基層を訪ね、学術と芸術を横断した、異能の人の原点が大阪にあったことは、意外に知られていない。

<2023年 上町台地トークライブ・はじめに>



没後70年、折口信夫の年譜紹介

構成：大阪ガスネットワーク CEL/U-CoRo プロジェクト・ワーキング (CEL 弘本由香里、B-train 橋本護)
報告：弘本由香里



謎の人、折口信夫の年譜を探る



ごく簡単に折口信夫の生涯を見てみたいと思います。折口は非常に謎の多い人として知られ、近年折口の人生をたどる研究が盛んになってきています。ここでは主な事績のみを紹介し、後ほど皆さまのお話の中で別の一面も掘り下げていっていただけたらと思っています。

生誕から大阪居住時代の折口信夫

折口は1887年、西成郡木津村に生まれました。父秀太郎は医院を開業し、薬や雑貨も扱っていました。そして木津幼稚園、木津尋常小学校へと進み、南区竹屋町の育英高等小学校に入学します。そこでいろいろな芸能との出会いを経験していくわけです。

その後12歳のときに大阪府立第五中学校(後の天王寺中学)に入学、ここで非常に深い交友関係を築く方々との出会いがあり、青春のいろいろな出来事も経験。そして奈良の神社を訪ねて思想的にも深い出会いもしています。富岡多恵子さんの説によれば、ここで遥空と呼ばれるようになったのではないかとわれています。

青春時代の屈折と文芸サロンでの出会い

非常に興味深いのは、心齋橋にあった金尾文淵堂という書店で薄田泣菫の詩集を購入していることです。ここは文芸サロンのような形でいろいろな方が集まっていた場所で、近代詩の輝くような作品との出会いもここで経験。また折口は幼少期、父から『万葉集』や百人一首を聞かされて育ち、『万葉集略解』という

本を買ってもらい、14歳のときに「文庫」「新小説」に投稿した短歌が入選するという快挙もありました。しかし成績は下がり、自殺未遂という非常に辛い経験もしています。世の中は、大阪で第5回国内勸業博覧会があり、その後日露戦争へと突入するわけですけれども、このときに卒業試験で落第点を取ったり、大和に3度旅行してまた新しい出会いや気づきも得ています。

中学卒業後に突然上京、國學院大學予科に入学

18歳で天王寺中学を何とか卒業し、家族としては医学を学ばせたいという思いがあったのです。ところが、折口は三



折口の「春のことぶれ」(1930年)の中の「大阪詠物集」に挙げられている歌は、思い出の情景を詠んだものが多い。



高受験を出願する前夜に進路を変えて上京し、新設の國學院大學の予科に入学しました。そして20歳で予科を修了して本科国文科に進みます。そこで国学者の先生から強い影響を受けて、根岸短歌会にも出入りするようになります。

大学卒業後に帰阪し今宮中学に奉職

そして1910年に國學院大學国文科を卒業して帰阪。この頃から釋空の筆名を使い始めたとされています。1911年には大阪府立今宮中学校の嘱託教員と

なり、1912年には伊勢・熊野の旅に出ています。1913年、柳田國男主宰の「郷土研究」に論文を発表して以降、柳田の知遇を得たのですが、両者は非常に複雑な関係であったともいわれています。

職を辞し、再び大阪を去る

1914年3月に今宮中学校を退職して再び上京し、29歳で國學院大學内に郷土研究会を創設。折口の大きな業績の一つである『万葉集』全20巻の口語訳を刊行しました。1917年には「アララギ」同人となり、また小説『身毒丸』を発表。1919年に國學院大學臨時代理講師となり、『万葉集辞典』を刊行しました。1921年には最初の沖縄・杵岐旅行をし、

十日戎 幼な心に響く出来事

おのれまづ たはれ遊びしにはかしの 人を忘れけむ

千日前 芸能者へのまなざし

合邦閣魔堂 あやしき闇と光

1922年、國學院大學教授になっています。1923年には慶應義塾大学文学部の講師になり、1924年には「アララギ」を去って、北原白秋らと歌誌「日光」を創刊しました。そして1925年、処女歌集『海やまのあひだ』を刊行し、1928年には慶大文学部教授となって芸能史を開講します。

大著『古代研究』刊行から『死者の書』まで

1929年には大作『古代研究』の刊行を開始。非常に難解だけれども多くの人が解説に挑みました。1930年に歌集『春の

ことぶれ』を刊行、この中に「大阪詠」があります。本人は自註で「これは失敗作だ」と述べていますが、それは大阪への想いの深さと裏腹なのではないかと思えます。

1939年には小説『死者の書』を発表。1940年、國學院大學学部講座に「民俗学」を新設。1941年に太平洋戦争が始まり、1944年には愛弟子の藤井春洋が硫黄島の戦地に向かいます。春洋を養嗣子として入籍させたのですが、残念ながら翌年戦死し、米軍上陸の2月17日を春洋の命日と定め、「南島忌」と名付けられました。

そして1949年、春洋の郷里でもある能登一ノ宮に父子墓を建立。1950年、宮中歌会始の選者に。そして1953年に胃がんで永眠。享年66歳でした。今年に没後70年に当たります。

折口信夫の大阪への想い

大阪に生まれ育ち、大阪にひとかたならぬ想いを抱いていながら、研究の大半は東京を拠点として展開されていたこと

西門はたそがれて 風吹きにけり。 経木書かむと言ふ人あり

四天王寺 常世の国と西方浄土

あかしやの花ふりたまる 庭に居りて、 人をはれ言ひそめにけむ

になるのですが、恐らく大阪に対しては終生特別な感情を心の底に抱いていたのではと思います。

折口は、常にアンチの道を選ぶ人

折口研究で知られる上野誠さんは、自著『折口信夫「まれびと」の発見』という折口の業績を口述でまとめた本のあとがきで次のように評しています。

「常にこの人は、アンチの道を選ぶ人なのだ。常に、マイノリティーの立場から、反発する心で学問をした人なのである。

短歌創作でも、主流のアララギ派とは、途中で決別した。神道研究でも、けっして主流ではなかった。民俗学でも柳田國男を思慕しつつも、柳田の方法とは正反対の方法を取った。官学に対しては、私学の立場から発言した。また、性的にも、マイノリティーであった。常に、下位者や弱者、マイノリティーの立場に立って、上位者や強者に対して、恨む心で学問をしてきた人なのだ。

いろいろな見方があると思いますが、こうした精神性のようなものは大阪の文化と非常に深く結び付いていると感じるところもあります。今日のゲストの先生方からも、折口の思想と大阪の関わりについて、どのような世界が出てくるのか、楽しみにお聴きしたいと思っています。

少年時代の折口と芸能の大阪

何よりも折口の原点は大阪にあったことは確かです。彼は、小学生時代にお駄賃を握って道頓堀や千日前の芝居に夢

天王寺中学校 友人との出会い

小橋過ぎ 鶴橋生野来る道は 古道と思ふ見覚えのなき

舍利寺 古代の道を逍遙する

中になり、思春期には心齋橋の書店に足しげく通って近代詩歌に心をときめかせ、旧制天王寺中学時代は上町台地の夕陽の眺めに魅了されました。「まれびと」につながる折口学の種がそこで宿されたのではないかと感じずにはられません。これにて、「はじめに」の話を終えて、本日のゲスト・歌人の高田ほのかさんにバトンタッチしていきたいと思えます。

なお、「上町台地今昔タイムズ」はバックナンバーをホームページで公開しておりますので、ぜひご興味のあるところをご覧いただければと思います。

折口信夫年譜	
大阪居住時代	
1887年	(明治20)2月11日 西成郡木津村に父秀太郎(医業)、母こうの四男として生まれる
1890年	木津幼稚園に通う
1892年	木津尋常小学校に入学
1896年	南区竹屋町、育英高等小学校に入学
1899年	大阪府立第五中学校(後の天王寺中学)入学(12歳) 同級生には武田祐吉(国文学者)、岩橋小弥太(国史学者)、西田直二郎(国史学者)がいた
1900年	(13歳) 大和飛鳥坐神社を訪れ、仏教改革運動家・藤無染と出会い遥空(愛称)と呼ばれる(富岡多恵子説) 金尾文淵堂で薄田泣菫『暮笛集』購入
1901年	(14歳) 父親から『万葉集略解』を買ってもらい『文庫』『新小説』に投稿した短歌各一首入選
1902年	成績が下がる。暮れに自殺未遂
1903年	天王寺で第五回国内勸業博覧会
1904年	(17歳) 日露戦争始まる 卒業試験にて4科目で落第点を取る。大和に3度旅行し、若き日の釈空に共感
1905年	(18歳) 3月天王寺中学校を卒業する

東京居住時代	
1905年	(18歳) (医学を学ばせたい家族の勧めに従って三高を受験の出願前夜に進路を変えて上京、新設の國學院大學の予科に入学)
1907年	(20歳) 國學院大學予科修了、本科国文科に進む 国学者三矢重松に教えを受け強い影響を受ける 根岸短歌会に出入りする
1910年	(23歳) 7月 國學院大學国文科を卒業

大阪居住時代	
1910年	(23歳) 帰阪。この頃から釋空の筆名を使い始める。
1911年	10月 大阪府立今宮中学校の嘱託教員
1912年	伊勢・熊野の旅に出る
1913年	(26歳) 『三郷巷談』を柳田國男主宰の「郷土研究」に発表 以降、柳田の知遇を得る

東京居住時代	
1914年	3月 今宮中学校を退職し、上京
1916年	(29歳) 國學院大學内に郷土研究会を創設 『万葉集』全20巻(4516首)の口語訳刊行
1917年	『アララギ』同人 小説『身毒丸』発表
1919年	國學院大學臨時代理講師 『万葉集辞典』刊行
1921年	最初の沖縄・杵岐旅行
1922年	國學院大學教授となる
1923年	慶應義塾大学文学部講師 関東大震災
1924年	(37歳) 『アララギ』を去り、北原白秋らと歌誌「日光」を創刊
1925年	処女歌集『海やまのあひだ』を刊行
1928年	慶應義塾大学文学部教授。芸能史を開講

東京居住時代	
1929年	『古代研究』刊行開始
1930年	歌集『春のことぶれ』を刊行
1939年	小説『死者の書』を発表
1940年	國學院大學学部講座に「民俗学」新設
1941年	太平洋戦争始まる
1944年	愛弟子の藤井春洋、硫黄島に着任 春洋を養嗣子入籍
1945年	3月 大阪の生家が被災により焼失 春洋、硫黄島方面で戦死 ※米軍上陸の2月17日を折口春洋の命日と定め「南島忌」と名付けた
1949年	7月 能登一ノ宮に春洋との父子墓を建立
1950年	宮中御歌会選者となる
1953年	(66歳) 9月3日 胃癌により永眠。享年66歳

<2023年 上町台地トークライブ>

独創の国文・民俗学者にして歌人、折口信夫=釋迢空の原点がここに 折口少年は大阪と上町台地に何を見たのか



<フォーカス> 私の釋迢空アンソロジー、大阪詠で追う折口少年のまなざし

高田ほのか たかだ・ほのか

歌人。関西学院大学文学部を卒業し、未来短歌会に所属。短歌教室ひつじを主宰するほか、テレビ大阪の放送審議会委員なども務める。著書には『はじめての短歌』や『ライナスの毛布』など。



折口信夫(釋迢空)とは

折口信夫(歌人名・釋迢空)は国文学者、民俗学者であって、歌人でもありました。文献や資料を実感的に把握することを目指し、気に入った地域は何度も訪れて、そこで歌や自分の思想を深めていったと言われています。その独創的な内容から折口学とも称されています。

歌人としては、初めは正岡子規の根岸短歌会の「アララギ」に参加していたのですが、そこに飽き足らないものを感じるようになって反アララギ派を結成し、後に北原白秋や前田夕暮と共に機関誌『日光』の創刊に関わっています。

私が短歌をはじめるときっかけになった詩歌

次に紹介する作品について、皆さまもそれぞれ共通点は何かというのを意識しながらご覧いただけると幸いです。

まず、額田王の「あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る」という恋の歌です。

次に『平家物語』の一節、「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。沙羅

双樹の花の色、盛者必衰のことわりを現す。

次は、私が小学校の頃から愛する矢沢あい先生の『ご近所物語』という少女漫画作品で、最後の部分に「あたしはどこにいるんだろう。なにに向かえばいいんだろう」というモノローグがあります。

共通点は、五七調の韻律

時代もジャンルも全く異なる文芸を紹介したのですが、共通点があります。それは韻律がいいということです。中でも特に五七調、七五調のリズムが多いのです。これは音楽にも言えることです。

例えば、みんながよく知る曲では「蛍の光」。「蛍の光 窓の雪 書よむ月日重ねつつ」、これは全て七五調になっています。

現代の曲では、例えば「残酷な天使のテーゼ」。「残酷な 天使のテーゼ 窓辺から やがて飛び立つ」、これもすべて五七調なのです。この五七調、七五調のリズムは、日本で暮らしていると子どもの頃から自然と耳に入ってくる、日本語が一番美しく輝くリズムなのです。

こうした一定のリズムを持った韻文に対して、一定のリズムがないのが散文です。散文は新聞や小説、メールなど、相手に伝えるための言葉が主で、韻文は詩や短歌、俳句のように、神様にささげるために生まれた言葉なのです。

天神祭献詠短歌大賞

私が実行委員をしていた天神祭献詠短歌大賞というものがあります。大阪天満宮でコロナ前まで開催していましたが、学問の神様であり、歌の神様でもある菅原道真公に短歌を献詠する短歌大賞で、全国から「祭」に関する短歌を募集していました。

天神祭献詠短歌大賞



菅原道真公に短歌を献上

大阪天満宮 参集殿



大阪天満宮 本殿

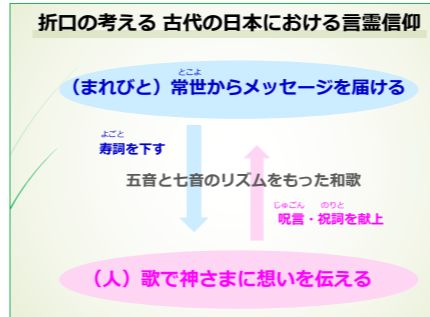
最も調べ豊かに、体感をもって、日本人のこころに入ってくる五七五七七の型(短歌)に乗せて捧げる



菅原道真公に短歌を献詠



これは折口の考える言霊信仰ともつながっているのですが、古代人は言葉には力がある、言霊があると信じていました。言葉を磨かなければ神様には届かないので、神様から授かった言葉を後世に伝えるためには洗練された型が必要だと折口は考えました。それが五音と七音の律を持った言葉、和歌の形式だということです。



言霊である和歌は、声に出すことで力が増すと信じられていました。ですから、今でも歌会始では、みんなで1カ所に集まって、祝詞(のりと)を献上することをしてしています。これも折口の考える古代日本における言霊信仰と通ずるものがあります。

折口の考えた言葉である「まればと」というのは、神でもあって、人でもあります。そのまればとが常世からメッセージを人に届けます。これを「寿詞を下す」と言います。逆に、人は歌で神様に思いを伝えていました。これを「呪言・祝詞を献上する」といいます。この双方の行為が、五音と七音のリズムを持った和歌で交わされていたのです。

天神祭献詠短歌大賞でも、菅原道真公に全国から集まった短歌を献詠するという儀式をしており、私たち選者も大

賞の短歌を道真公に向けて声に出して献詠するというをしていました。最も調べ豊かに、体感をもって日本人の心に入ってくる五七五七七の型に乗せてささげていたのです。

折口の大坂詠をたどり、実感から短歌を詠む

先日、弘本さんに丁寧にご案内いただいた、「今昔タイムズ」の19号の裏面にある地図のとおり、合邦辻の閻魔堂から最後は折口信夫の生家までを巡りました。その後もう一度1人で巡り、折口と呼吸を合わせながら歌を作ったので、みなさんに折口の歌と私の歌の両方を見て楽しんでいただけたらと思います。

「摂州合邦辻」の世界

まず、合邦辻界限です。四天王寺前夕陽ヶ丘駅から徒歩8分ぐらいの界限になります。通天閣も見えていて、すごく晴れていて気持ちが良かったです。

こちらから合邦辻の閻魔堂に案内していただきました。この閻魔堂は、聖徳



合邦辻 界限

太子が開創されたとも伝えられています。浄瑠璃「摂州合邦辻」の舞台だったようです。この中に難病が治るといふくだりがあるが、現在も病氣治癒を祈願する人が訪れます。

ここで折口が詠んだのが、「晦日夜のあらし燈燭つ堂の隅目にのこりつゝ現実なりけむ」という歌です。大晦日の夜、閻魔堂の隅でロウソクの炎が動いている。それが大人になった今も目に残っている。あれは本当に現実であったのだろうかかと回想しています。

そして私が詠んだ歌が、「蠟燭に目を借りながら言霊は借りながら言霊は折口の視たうつつにあらん」です。中がすごく暗くて、蠟燭の火に目を借りながら、折口の見た言霊は本当にうつつだったのだろうかという歌です。これも実感から詠んだ歌になっています。もう1首、閻魔堂からつくった歌が「五十円也と書かれたローソクの短くなるまで短歌を捻る」です。ローソクが50円だと書かれていて、そこからなかなか歌ができなかったのですが、それをそのまま歌にしてみたらいい



蠟燭に目を借りながら言霊は借りながら言霊は折口の視たうつつにあらん

晦日夜のあらし燈燭つ堂の隅。目のこりつゝ現実なりけむ

折口の大阪詠を辿り、実感から短歌を詠む 合邦辻閻魔堂

※緑の文字が折口信夫の大阪詠



折口の大坂詠を辿り、実感から
短歌を詠む 合邦ヶ辻閻魔堂
五十円也と
書かれたローソクの
短くなるまで短歌を捻る

のではないかと、このように
五七五七七にしてみました。

逢坂をゆく子どもたち

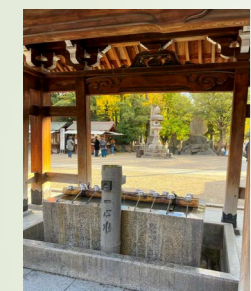
次は逢坂です。大阪という地名の由来にもなった場所だと言われています。合邦辻から東へ上がって四天王寺の西門に至る坂です。こちらで詠んだ歌です。このときちょうど、カラフルなランドセルを背負った小学生たちがいたので、こんな歌を詠みました。「逢坂に青、赤、ピン



折口の大坂詠を辿り、
実感から
短歌を詠む 逢坂



逢坂に青、赤、ピンク
とりどりの
ランドセルと待つ
かっこうの音



手水舎

かたむけた柄杓に
水を沿わせつつ
鼻腔に微かカルキのにおい



折口の大坂詠を辿り、実感から
短歌を詠む 一心寺



折口の大坂詠を辿り、実感から
短歌を詠む 一心寺
道に向く逢坂寺の墓石の
夕つく色を、見てとほるなり
墓石の右手に
老いた椎の木の
おまえも聞いたか折口の歌

クとりどりのランドセルと待つかっこうの音」。かっこうの音というのは、歩行者用信号が青になったときの音です。みんなのランドセルのカラフルな色に続いて、私も渡りました。

一心寺のイチョウと夕光

次にご案内いただいたのが一心寺です。手水舎で手を洗ったときに詠んだ歌が、「かたむけた柄杓に水を沿わせつつ鼻腔に微かカルキのにおい」です。

一心寺ではちょうどイチョウがきれいで、小さな子がイチョウの葉を拾っている場面に遭遇して、このような歌を詠みました。「銀杏の葉しゃがんで拾う小さき背を微笑んでいるながき夕光(ゆうかげ)」、これは夕方日の光のことです。

一心寺のお墓の方から折口が詠んだ歌が、「道に向く逢坂寺の墓石の夕つく色を、見てとほるなり」です。墓石に夕日の色が迫っている。それを見て私も今、この道に向かって伸びている墓石の影を見て通っているのだよという短歌です。時間の経過を表現している、いい歌だと思います。

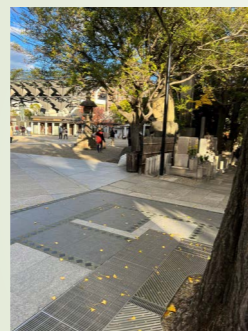
私の詠んだ歌が、「墓石の右手に老

いた椎の木のおまえも聞いたか折口の歌」です。昔からある椎の木を見せていただき、このような歌をつくりました。

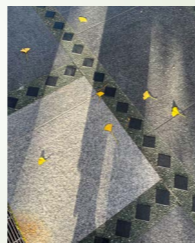
極楽浄土につながる四天王寺西門の夕陽

次が四天王寺の西門です。西門の中から橙色の夕陽がわーっと見えるのがいいのです。西門は極楽浄土につながる地だといわれています。こちらから詠んだ折口の歌が、「西門(さいもん)はたそがれて風吹きにけり。経木書かむと 言う人あり」です。折口は歌の中に句読点を結構使います。折口の論文によると、活字にする場合、自分の呼吸や思考の休止点を明確にするために句読点を打っていたと書いていました。実感の折口ゆえだと思います。

私の作った歌が、「西門(にしもん)の四角からくる橙の言霊さきわうはるか万葉」です。「さきわう」とは不思議な力を発揮するという意味です。「西門の四角から来る橙の光」には何か言霊のシンパシーがあるような気がして、不思議な力は万葉から来ているのではないかと、この歌です。



折口の大坂詠を辿り、実感から
短歌を詠む 一心寺
銀杏の葉しゃがんで拾う
小さき背を
微笑んでいるながき夕光



折口の大坂詠を辿り、実感から
短歌を詠む 四天王寺 西門前
西門はたそがれて
風吹きにけり。
経木書かむと 言う人あり
言霊さきわうはるか万葉

続いて、正門前の石鳥居から私が作った歌が、「見上げれば鳥居にとまる真鳥あり背なちいさき折口を乗せ」です。折口もよく言っていたことなのですが、天からまれびとが来るときに目印があったのではないかと。鳥居もそのような役割を果たしていたのではないかと。折口を乗せた透明な鳥がそれを目印にして降り立ったのではないかと。うに思いをはせて詠んだ歌です。

次に、口縄坂は折口の生家から天王寺中学に至る途中にたどったのではな



折口の大坂詠を辿り、実感から
短歌を詠む 口縄坂

石段の
影ふみながら
折口と歩を
かよわせてゆく

いかと言われている坂です。私は、「石段の影ふみながら口縄坂 折口と歩をかよわせてゆく」と詠んでみました。折口の思考を実感を持って自分の中に入れていったような歌になっています。

折口の生誕の地と幼少期に想いを馳せて

そこから、鷗町公園に案内していただきました。この辺には折口生誕の地の碑があり、歌が残されていました。「ほい駕籠を待ちこぞり居る人なかにおのづからわれも待ちごころなる」。「ほい駕籠」とは、芸者衆を乗せた駕籠のことです。それを待つたくさんの人たちを見ると自分の心もわくわくしてくるという少年時代の記憶を詠んだ歌だと言われています。ここから私は、「折口の歌碑にふれつつ目をとじる(ホエカゴホイ)のおき掛け声」と詠みました。

もう1首、「朝戸あけて、まづ聞く耳のすがしきや。えびす舞しよ。何を献(おま)さむ」という歌が残っていました。朝の扉を開けて、えびすの人形が舞う。その声を聞くと耳がすがすがしい気持ちになる。ああ、どんな歌を詠もうかとい



折口の大坂詠を辿り、実感から
短歌を詠む 鷗町公園
ほい駕籠を待ちこぞり
居る人なかにおのづからわれも待ちごころなる
折口の歌碑にふれつつ目をとじる
(ホエカゴホイ)のおき掛け声



折口の大坂詠を辿り、実感から
短歌を詠む 四天王寺 正門前
見上げれば鳥居にとまる
真鳥あり
背なちいさき折口を乗せ

う歌です。この歌から私が作ったのが、「折口の石碑に降りくる花蕊(はなしべ)は常世からきたまれびとでしょう」という歌です。花蕊がまれびとなのではないかと思っ、このような歌を詠みました。

最後に、願泉寺という折口家の墓がある所に連れて行っていただきました。ここから詠んだ私の歌が、「三人の折口ファンか 三本の線香みじかく寒風に立つ」です。お線香が3本あったので、「この線香は誰が置いたのですかね」と弘本さんに尋ねたら、「もしかしたらファンの方かもしれませんね」と教えていただき、これはすごくいいなと思っ、この歌を発想しました。

店主の話から和歌を詠む

次は「今昔タイムズ」の vol.17 ですね。裏面にインタビューしていただいた記事があります。

現地に行って話を聞き、短歌を詠んだことを、「大阪のまちを歩き、人と会い、歌をつくる」という見出しで紹介いただきました。

私は学生時代、大阪天満宮と天神橋筋商店街の「天神天満花娘」を務めて



折口の大坂詠を辿り、実感から
短歌を詠む 鷗町公園
朝戸あけて、まづ聞く耳の
すがしきや。
えびす舞しよ。何を献さむ
折口の石碑に降りくる花蕊は
常世からきたまれびとでしょう



文化庁の協力名義の承認を受ける「100首の短歌で発見! 天神橋筋の店ええとこここやで」

いたのですが、商店街の店主さんとお話しする中で、店主さん一人一人の気持ちがなかなか伝わっていないのではないかと思う場面がたくさんあり、せつかく短歌を作っているのだから、店主さんをインタビューして、その思いを歌にしたらいいのではないかと思ったのです。それで丸5年かけて天神橋筋商店街の店主さん100人に話を聞き、その人情を歌にしました。



天神橋筋商店街4丁目にある串焼の一番土産主は「使う水で出汁の違いがあるんや」と30年ぶりに復活した天満天神の水を使用

ああここが私の舞台
私には天満天神のお出汁を放つ
高田のか

1首だけご紹介いたします。4丁目の「串焼き富士」の店主さんです。この方は「使う水で出汁の違いが出る」とおっしゃっていて、30年ぶりに復活した天満天神の水を串焼きに使っていました。この店主さんの信念、大切にしている根本を伝えたいということで作った歌が「ああここが私の舞台仕上げには天満天神のお出汁を放つ」です。

後でテレビの取材を受けたときに、店主さんから「私の本当の気持ちがある短歌31文字の中に入っている」と言っていたので、すごくうれしかったです。短歌は31文字しかないのですが、100

文字以上の思いを31音にぎゅっと込めて伝えることができるのです。

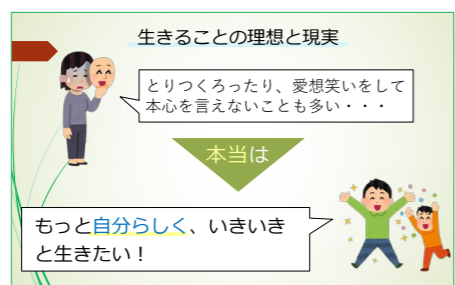
大阪天満宮で「天神橋筋のええとこここやで百首展」を開きました。来場者の方からは、「それぞれの店主さんの歌が一つの映画を見ているような重層的な広がりがある」というお声をいただきました。

すべての短歌を取めた『100首の短歌で発見! 天神橋筋の店ええとこここやで』という歌集もつくりました。

生きることの理想と現実

皆さんも自分に引きつけて考えていただきたいのですが、日々社会で生きていくと、取り繕ったり、愛想笑いをしなかなかな本心が言えなかったりすることが多いのではないかと思います。でも本当は、誰もがもっと自分らしくいきいきと生きていたいと思っていますよね。

今、令和の短歌ブームが起きています。その理由は、折口の言霊信仰にも通ずるものがあると私は考えました。折口いわく、和歌は言霊信仰から発生したものです。メールや新聞などの散文は対人に向けた水平方向の言葉ですが、言霊である和歌は垂直方向の、神様にささげるための言葉です。



変化が激しくて心が置き去りにされがちな SNS の時代、多くの方が本能的に実感求めていきます。特に Z 世代の若者などは SNS を中心に短歌で本音を吐き出しています。短歌は人間の実感から生まれるものだから、今も読む人の心にダイレクトに響くのだと私は考えます。

短歌教室ひつじの活動から

コロナになってから短歌教室ひつじも全てオンラインで実施しています。生徒さんからは、「五七五七七に言葉がは

まったときに数学が解けたような快感がある」と、日本語が一番美しく輝くりズムに乗せるから心をさらけ出せるのだという声があったり、「独学では気付かなかった視点をもらえる」と、作者と読者で1首を作り上げる実感がある。また、「オンラインだと短歌をツールにして生徒同士も本音を言いやすい」という声があったりして、気軽に自分の主張を発信できる SNS の時代にフィットしているのではないかと考えています。

メッセージを申し上げると、生きていけばつらいこともやるせないこともある。そんな中で短歌という杖を持っていると、憤りや怒りを、人を傷つける発言ではなくて本音を引き出す書く言葉で訴えることができます。そしてその杖は、地面をついて自分自身を支えることも、空にかざして相手に魔法をかけることもできます。それが短歌の魅力だと思っています。

司会(弘本) お話の中でも短歌は水平方向の言葉ではなくて垂直方向に届く言葉なのだとおっしゃっていましたけれども、ご一緒に歩いた町の風景が歌の力によってより深く心の内側へつながっていく印象を持ってお聞きすることができました。

高田さんをはじめ若い世代の方が、言葉を大事にする表現を直感的に求めて短歌の世界に入っていわれています。折口は一時期、短歌は廃れるのではないとも言っているのですが、それは形式に流されることへの警鐘で、むしろ今回、実感の言葉を紡いでいく歌のあり方を、まるで折口から投げられたボールを受け取るようにしてつないでいらっしゃるのだなと思いました。全く違う背景の中で生きてこられているのだけれども、それがシンクロしていき、それによって世界が深く耕されていくということを今日は実感させていただきました。

本当にいろいろな要素を盛り込んで、今日のお話を作ってください、ありがとうございました。



ダイアログ

「折口学・作品群を生んだ、大阪と上町台地のコスモロジーに迫る」

パネリスト：田野 登さん(大阪民俗学研究会代表)
高橋俊郎さん(オダサク倶楽部代表)
北辻 稔さん(古代史探検家)
司 会：弘本由香里(大阪ガスネットワーク CEL 特任研究員)



弘本 まず今日のパネリストのお三方をご紹介します。

大阪民俗学研究会代表の田野登さんは、本当に丹念に資料を読み解かれるとともに大阪の町を歩いて折口の事跡も繰り返し巡っていらっしゃいます。研究会をプラットフォームとして市内のさまざまなフィールドや資料、歴史民俗に関わる多くの会友の方々ともつながっていらっしゃいます。

続いて、オダサク倶楽部代表の高橋俊郎さんは、少し前まで市立中央図書

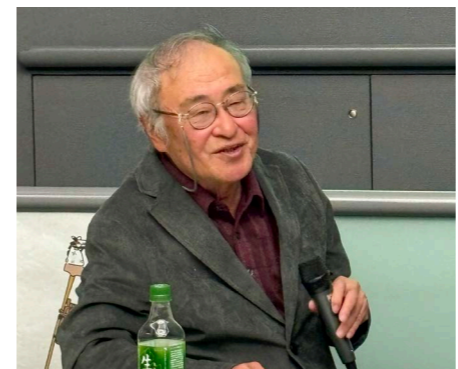
館の副館長を務めておられました。また大阪を代表する作家織田作之助(オダサク)を正当に評価するための研究や普及活動にも取り組まれています。そのオダサクと共通する原風景や原体験を持つ折口信夫や司馬遼太郎の足跡も追われていることから、今日は小説ファンにも興味深いお話をお聞かせいただけることと思います。

そして、古代史探検家の北辻稔さんです。今はなき「大阪人」という雑誌をご存じの方は多いと思いますが、その

生みの親、育ての親だった方です。折口がたどった世界を歩んでいらっしゃるという印象があります。生まれ育った河内に今もお住まいで、折口流の古代のコスモロジーを日々リアルに体感されています。

では、お三方それぞれの立場から、折口学・作品群を生んだ大阪と上町台地のコスモロジーに迫っていただきたいと思っています。まず、お三方それぞれの世界と折口の接点から紐解いていただきたいと思います。

幻視「まれびと」 —少年折口の世界



田野 登さん(大阪民俗学研究会代表)
大阪府立高校在職中から民俗調査に関わる。著書に「大阪のお地蔵さん」「水都大阪の民俗誌」ほか

田野 私が主宰する阪俗研(大阪民俗学研究会)は、会友の皆さんと情報共有を図り気楽に一緒に活動しようという会です。

折口少年の体験から

「今昔タイムズ」19号の表面に私の記

事が載っています。その中で、「芸能者に向けられた特異なまなざし」という小見出しで次のようなことを書いています。「大阪の野性」は折口の場合、周辺のさまざまな境遇や階層の人々の姿から読み取ったと私は見ました。とりわけ少年期の体験が基になっています。

その際、先ほどの高田さんの歌にも挙げられていますが、門付け芸人や大道芸人たちは、いわゆる「細民」であり、折口は、彼ら節季に訪れる芸人たちを「零落した神」だと幻視する「まれびと論」を唱えました。その辺は少し修正するところがあるかと思いますが、折口少年はそうした人たちに対する賤視とともに畏敬の念を抱いていたわけです。

「まれびと」という概念

「まれびと」という言葉を私自身の体験から紐解くと、子どもの頃、「お獅子はいつも怖いもの」でした。とりわけ正月のとき、実家の向かいの神農商業組合(露

店商の親方の家)では、氏神さんのお祭りのときは違う獅子舞が来ていました。当時、何となく好奇心はあるものの、何かちょっと怖いという目で見ていたのですが、その人たちが門付け芸人だということを知りました。



大神楽「守貞謄稿」巻4(雑業) 国立国会図書館デジタルコレクション

正月や節季に訪れるこれらの外来者を、折口は「まれびと」と称しました。「まれびと」には、「まれに来る人」という意味から「珍客」も含まれます。「来訪する神」とも述べ、人とも神とも取られる概念として設定していたので、実態は何なのか、学者によってはその実像を捉えようとしていたりもしました。

折口少年の通学路の情景

通学路で折口は何を見たのかということなのですが、折口の自宅の木津から天王寺中学までの間に上町台地を通過します。それについては木下順という研究者が雑誌「國學院経済學」に挙げており、経済学の観点から社会問題を取り上げながらその道筋を追っています。

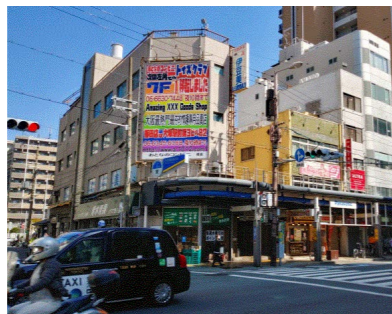
とりわけ学校の南東にあった毘沙門池で折口が放課後、寿法寺という池の西南に当たる所での時間に焦点を当てています。ちょうどそこが高台であるため、生駒、信貴、二上山といった景色なども望めました。ついこの間、研究会のメンバーと歩いたところ、今は全くそういった面影はないのですが、紅葉寺といわれるかつては風光明媚だった場所を想像しました。また、俊徳道なども東に延びていました。

そうして帰路、四天王寺に寄って、逢坂・合邦辻・今宮戎・木津などを歩くと木下論文は書いています。以下取り上げますのは、説経節「しんとく丸」や謡曲の「弱法師」などの主人公の俊徳丸が身を寄せた池のほりには非人小屋が建っていたことです。(しばしば「非人」という言葉を使いますが、近世以来の身分社会における非人および生活困窮者を指します)

合邦辻の所では、玉手御前が頬かぶりをして現れます。それを折口は「玉手御前の恋」に「非人乞食の服装」をしていると評しています。そのような眼差しを投げかけるのは、何故でしょう。合邦辻境界はかつては、非人が徘徊しているような場所でもありました。

民俗学者の小川直之は、折口の通学

路を次のように記述しております。とりわけ江戸時代以後の貧窮街の長町裏を取り上げていて、小川は長町裏のことを「階級社会の現実と歴史伝承の世界」と記述しています。先ほど述べた身分社会における非人に着目しているのです。江戸時代以後の長町、とりわけ長町裏が一体どのような場所であったのかということで、先日フィールドワークで改めてその地を訪ねました。長町というのは現在の日本橋筋のことです。



長町の現在

出発点の天王寺中学の場所は現在、大阪国際交流センターになっていますが、以前、大阪外国語大学があった場所です。そして、天王寺区役所に毘沙門池の碑があります。そこを南に行くと、先ほど述べた紅葉寺があり、ち



逢坂道標

ど池の南西のほとりの高台に位置します。逢坂の道標の表示によりますと、真つすぐ西に行けば木津となります。

戦前の雑誌『上方』に、浅井泰山は日本橋筋には「屑拾ひや非人」が住んでいたと書いています。明治の中頃までは彼ら「厄払い」といった人たちがいたでし

うから、幼年期だった折口は、その様子を実際に目にし「ヤァック払いましょ」といった触れ言葉を耳にしたであろうと想像されます。

幻視「まれびと」の末裔

小川直之は「まれびと」の実像について触れていて、折口は沖縄で万葉人の生活の面影を見たと述べています。

「内地」においては、折口が書いている「万葉人の生活の面影」というのは一体何なのかというと、先ほどの折口が歩いた道に私はそれを求めます。

折口は、明治以前になくなっていた節季候(せきざろ)を実際には見ていないけれども、少年時代に見た人たちを「まれびとの末裔」と幻視していたのではないかとことです。

折口の詠物集には、先ほど高田さんが挙げられていた「えびす舞し」の歌が詠まれています。「えびす舞し」とは、正月に豊漁を予祝するために門付け芸人が行うものであり、折口が詠んだ「西の宮えびす舞し」と同類の祝言職は幾つも見られます。例えば萬歳や獅子舞、猿回しなどはその類いです。今日、会場参加の東野利明会友から借りた成瀬國晴『なにお難波のかやくめし』でも、まさに獅子舞はそういったものであったと書かれています。

船本茂兵衛は、萬歳や獅子舞、猿回しなどはみな「物乞ひ」だったと書いています。まさにこれこそ末裔ではないかと思うのです。萬歳を糸口に昔を探ってみたら、漫才が舞台上で演じられるようになったのは大正中期だったとされています。



右端の男が「厄払い」郷土雑誌「上方」38号1934年2月号



合邦辻焰魔堂



天王寺区役所・毘沙門池記念碑



毘沙門池南西畔高台 寿法寺の紅葉



大阪府立中央図書館のポスター

伊勢大神楽

ということは、それまでは門付け芸人だったということであり、まさに折口の生きた時代と重なります。私は最初にも言ったように、昭和30年ごろにそういったものを見ましたけれども、現代もそれは生きているのです。大阪府立中央図書館では、伊勢大神楽を中心に家を回る芸能について考える講演会が2023年7月にありました。

「まれびと」論の顛末

ここまでですと「まれびと」論を紹介しただけになりますので、折口は何を言いたかったのか、何を言えなかったのか

折口信夫 夕陽のたまもの



高橋俊郎さん (オダサク倶楽部代表) 元大阪市立中央図書館副館長。天王寺図書館勤務時代以来、地域の歴史文化探究に勤む。

高橋 私はオダサク倶楽部代表の他にも、帝塚山派文学学会を立ち上げて、今は副代表を務めています。

ということになるのですが、実は折口が『古代研究』に載せる際、その3カ月前に書かれた文章が削られています。その文章では、「まれびとは古くは神を指す語であって、常世(とこよ)からやって来る」ということを書こうとしたのだけれども、それが削除されているのです。これだと「神」が見えにくくなっています。元々折口が書いた文章で、「簀笠の信仰」の章において既に神が見えなくなっています。

この部分を私は次のように要約しました。「近世においては、春・冬の訪問者を神だと知らなくなってしまう、祝言を唱える人間と考えられるようになった」と。つまり、若い衆や祝言職の者が神の役を果たすようになったと読み取られます。これとよく似ているのが、柳田国男がその4年前に書いた文章「神に代りて来る」です。

それによれば、萬歳や物よしというのは、「こつじき」あるいは乞食をホイトという「ほぎ人」だということです。「ほぎ人」とは、めでたい言葉を伝える人であり、折口が言う「祝言職」に当たります。既に柳田は、「祝言職」を折口に先んじて挙げている

折口信夫の通学路

私が注目したいのは、折口信夫の通学路の中でも夕陽丘からの日没です。第五中学からの帰路は、断崖の上から夕陽を見ることになるのが常でありました。まずはその辺をちょっと見てみたいと思います。

折口の通学路は、鷗町にある自宅を出て、颯川の支流の橋を渡っています。この頃ちょうど西神田町に司馬遼太郎が住んでいて、通学路が非常に重なる部分があるので面白いのですが、ここは折口に絞っていきます。

先ほどあったように合邦辻閻魔堂や家隆

のです。発表『古代研究』において折口自身により削られたのは「まれびとは古くは神を斥(さ)す語」でありましたが、この経緯からしますと、折口が柳田との関係性を鑑みて付度し、削除を余儀なくされたとばかりは言えなくなります。

以上、折口が少年期に実際に見た門付け芸人に「まれびと」を幻視し、長じて「まれびと」を遡及すれば「神」とする概念形成の顛末を幻視「まれびと」、すなわち折口少年の体験した世界を踏まえて考察しました。

弘本 お聞きになってお分かりのとおり、資料をものすごく丹念に調べ上げられて、かつ現地を訪ね歩かれてこうした論を立てていかれるので、聴き応えがたっぷりの内容でした。

高田さんと私が歩いたのも、上町台地から長町を抜けて木津まで歩くというコースで、かつては社会階層がものすごく多様な世界を横断していくということで、それを毎日行っていた折口少年は特別なものを「幻視」していたのだらうとも実感しました。

塚、新清水寺や増井の清水があつて、そこを題材にしたような作品もあります。要するに、折口少年のフィールドだったわけです。

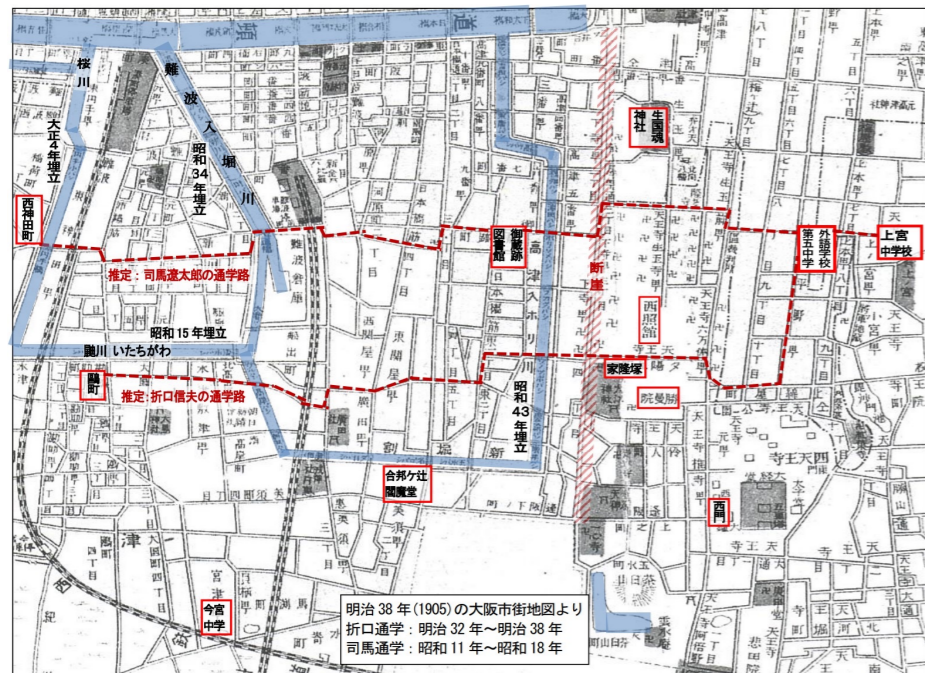
問題になるのは、断崖絶壁である上町の断層です。四天王寺ができたとき、断崖の下はまだ海でした。外国から来た



法然上人「源空庵」(一心寺)からの「日想観」(「法然上人日想観の図」土佐光茂筆)



明石海峡に沈む夕陽。山越の阿弥陀園と同様、二層の間に日が沈むと同時に、西方浄土から阿弥陀仏が現れる。特にお彼岸の日など、このような日没が拝めるのは、この夕陽丘の地から以外にはない。



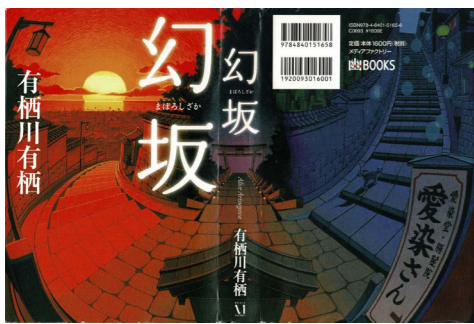
折口信夫の通学路—夕陽丘からの日没が原風景—

帆船がここにとどまって、天王寺七坂を登って四天王寺に行くという土地柄です。今も存在するこの断崖を折口少年が上り下りしていたことに注目しました。

一心寺に伝わる土佐光茂筆の「法然上人日想観の図」によると、遠くの方でふたこぶの山の間に日が沈んでいます。これが日想観において重要なところで、阿弥陀来迎と同じように、明石海峡に夕陽が沈むのをお彼岸の頃に見られるのはこの場所しかないのです。ここからしか見えない来迎のために源空庵(後の一心寺)を建てたわけですね。ここに注目しておいていただきたいと思います。天王寺七坂からの夕陽の雰囲気は、有栖川有栖さんの『幻坂』の表紙絵によく現れています。

折口の略歴の中に夕陽のたまものを見る

折口の祖父・造酒介は、飛鳥坐神社



天王寺七坂からの夕陽
有栖川有栖著『幻坂』の表紙絵(装画:影山徹)

の神主の出です。その部分は、後からも関係のある當麻寺との関係も含めて大きな意味合いを持ちます。中学のときには、初めて奈良を訪ねたりもしています。折口家の菩提寺は生家近くの願泉寺で、元々は天台宗なのですが、蓮如が大坂石山寺に来たときに浄土真宗に改宗しています。

兄弟は静、順、進、信夫、親夫、和夫というふうに名付けられたのですが、これは信夫が母・この末子で第2人が異母弟であるため、母・この実子であるのだという主張からあえて1字で読ませるような形で「シノブ」と名乗っていたといわれています。信夫が生涯結婚しなかった理由の一つがそこにあると考えられています。

第五中学に入り、同級生の辰馬桂二に対する思慕は、後に小説『口ぶえ』『死者の書』でも描かれています。

また、初めて飛鳥へ一人旅した際、9歳年上の浄土真宗の僧侶藤無染と出会い、憧れを持ちます。本当はもっと近い関係になって、上京したときには無染の所に同居していたので、無染から「遼空」の法名を得たともいわれています。これは富岡多恵子さんの説で、富岡さんが書いた『釋遼空ノート』を巡ってはいろいろ異論が出されていますけれども、『釋遼空ノート』に書かれていることは、信じ

るに足ると思います。それに沿って街歩きをするとぴったりくるのです。それで富岡説を取っています。

國學院を出た後は今宮中学の教員となりました。生まれた場所のすぐ近くです。そして、門弟の藤井春洋を養子としましたが、春洋は硫黄島で翌年戦死します。その後、外来神の要素を見いだしてそれを「まれびと」として位置付け、さらに「まれびとと信仰」に基づく日本文学の発生論を示したといわれています。「アララギ」が途切れたりいろいろありますが、でも、「歳深き山のかそけさ。人をりて、まれにももの言ふ 声聞こえつ」のように、折口は歌に句読点を打つということもしました。これは息継ぎを表していて、その方がぴったりくるという理由があったようです。

通学路近辺を題材にした作品

『身毒丸』は、いわゆる「俊徳丸伝説」が基になっています。合邦辻閻魔堂での談が『身毒丸』に出てくるわけではありませんが、通学路上で聞いていた物語が後で出てくるので、折口は原風景から生まれた小説というのは間違いのないでしょう。

「増井の清水の感覚」というのは、折口信夫生誕の地の歌碑にあります。「ほい駕籠を待ちごぞり居る人なかにおのづからわれも待ちごゝろなる」、増井の清水は新清水の下にある天王寺七名水の一つです。



後列中が折口信夫 中学5年生17歳

『死者の書』と阿弥陀来迎

『死者の書』と當麻寺の二上山の阿弥陀来迎との関係については、角川書店



『死者の書』(角川書店の初版本)



折口と司馬遼太郎の共通点が多い。司馬の生まれ故郷である竹内街道の地域は『死者の書』の舞台。

から昭和22年7月に出した『死者の書』には「山越しの阿弥陀像の画因」を付しており、ここでは阿弥陀来迎がテーマになっていることが分かります。作者自身はこの執筆の動機を、ある朝見たこぐらかった夢(自分が愛情を訴えられずに死別した人に夢の中で自分への愛情を打ち明けられた)にあったとしています。二上山に葬られた大津皇子がよみがえるところから、藤原家の耳面刀自(みものとし)、郎女の話にいきます。

これが有名な一節で、「彼の人の眠りは、しづかに覚めて行った。まっ黒い夜の中に、更に冷え圧するものの澱んでい

るなかに、目のあいて来るのを、覚えたのである。した した した。耳に伝うように来るのは、水の垂れる音か」という感じの文です。

「した した した」というのは気持ち悪いですね。私の感覚では、ちょっと気味が悪い文章をさらっと書けるところが折口流だと思うのです。

ふたこぶがある所に沈む夕陽に関しては、冷泉為恭の阿弥陀来迎図というのが残っていますけれども、この絵のように、日が沈むと同時に阿弥陀如来が出現するのです。それが阿弥陀来迎です。浄土信仰はそれが中心になります。

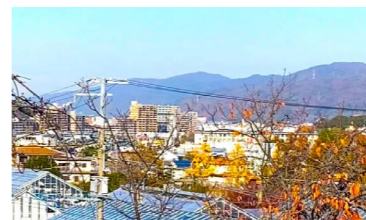
大阪のコスモロジーについて



北辻 稔さん(古代史探検家)

雑誌『大阪人』の元編集長、住吉文化事業実行委員会(すみ文)委員長。南河内の地に身をおき古代史を体感している。

北辻 私は長く無職(笑)で肩書もなく、暇な老人に過ぎないのです



羽曳野丘陵から見た生駒・二上・葛城・金剛の山々

夕陽丘からの夕陽が折口信夫の根底にある浄土信仰につながっている



當麻寺展(2013年、奈良国立博物館)のチラシから



冷泉為恭筆の阿弥陀来迎図

このように、折口信夫の原風景である夕陽丘からの夕陽が、根底にある阿弥陀来迎や浄土信仰につながっているわけですね。夕陽丘を上がってそこにあるいろいろな事象ということではなく、3度も自殺を図るということが中学時代もありましたけれども、夕陽丘に立ってどういふ感じで夕陽を眺めていたのか。その日想観の夕陽が焼き付くのです。そんなふうに私は夕陽丘の上で感じました。

弘本 本当に濃密なお話をさせていただいて、「夕陽のたまもの」というのはなんとも言いえて妙な表現ですね。

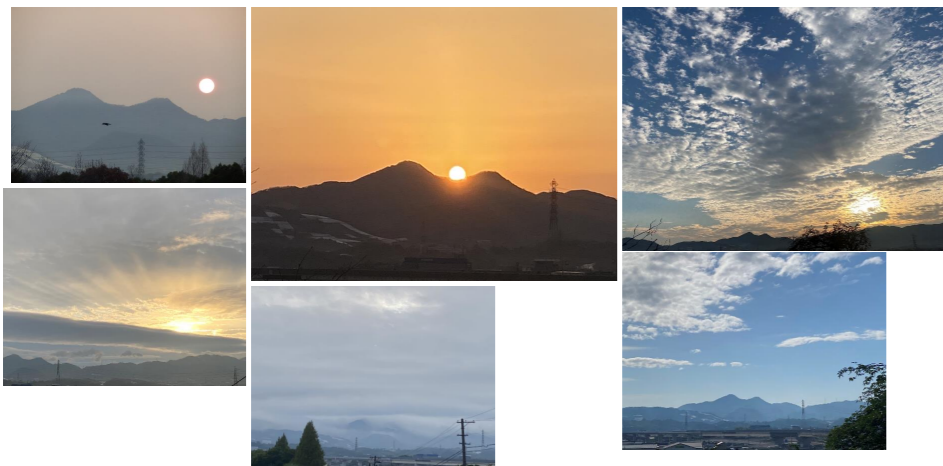
かんてくる想念や感覚のようなものをブログに上げて、古代史に何か新しい発想や提案ができればいいなと考えています。

ブログは「MY 古代史探検」というタイトルで立ち上げているので、よろしかったら見てやってください。古代史探検家という名前を今日こうして多くの人の前でしゃべるのは初めてで、実は「古代史探検家」デビューの日でございます(笑)。

河内から見る二上山

私は二十数年前、人間ドックでコレス

河内から見る二上山。年2回、3月3日、10月3日あたりに山の真中から日が上がる。



テロール、血圧、中性脂肪の値が高いということで、医者から「薬で抑えますか、運動しますか」と聞かれて「運動します」と言って以来、ほぼ毎朝歩いています。私は生まれも育ちも羽曳野市尺度で、近くの大阪府立環境農林水産総合研究所をぐるっと一回りするのですが、二上山が目前に見えます。年に2回、朝日がど真ん中から上がりますが、神々しいとはこのことかというぐらい思わず手を合わせてしまいます。また、春夏秋冬いろいろな風景が見られるので、二上山写真家になろうかと思ったほどで、そうした二上山の風景とともに育ってきました。二十数年歩いているうちに気が付いてきたのが、二上山の向こうに大和があって、ここから歩いて10分ぐらいの所に古市古墳群が広がっている。歴史の本をいろいろ読んできたのですが、大和・河内は古代日本の表舞台であり、日本という国の原点をつくった場所でもあります。その場所が私の足元から続いている土地にあるではないかという考えに行き着いたのは、私にとってはものすごく大きなことでした。先ほどから実感という話が出ていますが、これはまさに実感であり、

私のコスモロジーではないかと思っています。

霊山としての生駒山地

そんな実感に基づいているいろいろな所を歩いています。葛城や大和は当然、意外と自分の近くに大史跡があるということが分かり、それならもっと本格的に調べてみようということで、生駒山の大阪側の麓・生駒西麓を調べてみました。南は柏原から北は枚方、寝屋川ぐらまで、12のシリーズに分けてブログにしています。その中に有名なお寺では、野崎観音があります。そこは浄瑠璃の「お染久松」などの物語が生み出されてきた場所でもあります。石切神社も最近若い人になんか人気なようです。土日になると、お百度参りで何百人もの人が行列を組んで回っています。門前を横切っているのが参道商店街です。最近あまり見られませんが、昔は白装束の山伏がいて、女性がいろいろと悩みの相談をしている、泣きながら話をしている人もいました。最後に山伏が印を結ぶと、相談した人がはっと我に返ったような朗らかな顔になり、帰っていかれます。そういう

昔ながらの呪術的な風景がまだあるような場所です。次は、信貴山です。朝護孫子寺が非常に有名で、聖徳太子がここで毘沙門天を感得したことから創建されたという大変古い歴史があります。京からも皇族がお参りに来たり、醍醐天皇の病気を治したり、そういう霊験あらたかな場所です。石切神社から生駒山頂まではかなり急峻な道なのですが、沿道にずっと石の地藏さんがあって、横に弘法大師の石像とセットで四国八十八カ所を模して作られています。この狭い谷間には、10数カ所の寺社があり、巡礼道と合わせて「祈りの谷」と言ってもよさそうです。その行き着く所が興法寺とあって、真言密教、修験道の拠点だと言われる場所です。それを越えると生駒遊園があって、そこからケーブルで下ると生駒の聖天さんとして有名な宝山寺があります。びっくりしたのは、玉垣の寄進者の名前と金額です。100万、200万円は当たり前で、1000万、5000万、さらに1億円というものもあるのです。1億円の寄進者は西宮の人の方ですけども、いろいろ見ていくとほとんどが大阪方面からの寄進者でした。先ほどの生駒越えもそうですし、野崎観音も石切神社も、お参りされる方のほとんどは大阪ないし大阪近辺の方で、そこへお参りして、祈祷してもらってよみがえるのです。大阪市中にとっては、生駒西麓は魂が癒やされる場所なのか、人間が生き返ってくる場所なのですね。その点では生駒西麓は大阪市中にとってのコスモロジーの一つの範囲と捉えることができていると思います。生駒西麓は日帰りで戻ってこられますけれども、ちょっと足を伸ばして吉野や

霊山としての生駒山地…野崎観音



野崎参道商店街



慈眼寺(野崎観音)



石切劔箭(つるぎや)神社



石切参道商店街

霊山としての生駒山地…信貴山



信貴山朝護孫子寺

高野山となると1泊2日ぐらい、さらに奥の熊野になると1週間、湯の峰温泉で湯治しながらとなると10日や1カ月になります。白河上皇を含め京のお公家さんも頻繁にお参りした場所です。大阪市中を取り巻くさまざまな癒やしの空間・コスモロジーの輪があるわけです。



墓場としての生駒山地

『身毒丸』の物語が発生した高安の辺りには、俊徳丸鏡塚古墳というのがあります。俊徳丸が葬られているかどうか

巡礼道としての生駒越え



墓場としての生駒西麓…高安千塚古墳群など



おわりに(パネリストからもう一言)

弘本 ありがとうございます。最後にきちんとコスモロジーでまとめていただきました。関西・大阪に暮らす者の豊かさというのか、大変な時間の蓄積をさかのぼって、死者と生者が共にあって、そこに広がるコスモロジーを共に体感できるというのは得難い大きな資産だなど改めて思いました。それが折口の思想を形づくる原点になっているということも実感を持って受け止めることができました

思います。今日のために、それぞれのお立場から大変な準備をしてテーマの本質に迫ってくださって、感謝の気持ちでいっぱいです。クローキングの時間が迫っております、本来でしたら議論を交えたいところですが、今後に譲って、最後にお一言ずつ聞かせていただければと思います。今の時



を読み直したところ、そういう目から見ればそう見えるだけかもしれませんが、かなりコスモロジー的な考えで風景を見えています。藤原の娘が当麻にふらふらと来るわけですが、そのときも耳成、畝傍、香具山、それから飛鳥という土地を懐かしく見渡す。その辺のロケーションを読み込んだ話が出てきますし、最後の菩薩降臨の風景はまさに二上山のコスモロジーそのものだと思うのです。菩薩が放つ光で輝く當麻寺などの寺々を描いて曼荼羅にしたという話は、精神的なものの一つの反映です。コスモロジーとは、単なる風景ではなくて人々が抱く精神的なもののネットワークが形づくられる場所というふうには規定できると思うのですが、それがかなり目に見えるものとして捉えられていたわけではなかったかと考えられます。二上山の話が先ほど出ましたが、今回こういう機会でもあるので『死者の書』

代に折口の思想や感性を形づくれた風土やその軌跡をたどることによつて、お感じのことをおっしゃっていただいて、本日のフォーラムを締めくくりたいと思います。

あまりに深い 折口という人物

高橋 富岡多恵子さんが『釋迢空ノート』で書いているのですが、釋迢空=折口信夫が最晩年、部屋に1冊の詩集を置いてい



て、それを学生に読むように勧めていたのです。それは小野十三郎の『大阪』という詩集です。小野は散文詩であり叙事詩ですし、むしろ短歌の叙情を排していた詩人で、折口とは真逆なのです。時代は重なりますが、詩集を置いて学生に勧めたという事実を富岡さんも書いていますので、私はそれを見て、「折口という人は理解し難いところがあるなあ」と思っています。それも全て包含して折口とは何者なのかというのは、歌の世界も小説の世界もそうですけれども、難しいけど追究する価値があると感じるところです。

柳田とは異なり、 折口学は都市民俗学

田野 今日、私が学んだことの一つは、高田ほのかさんのおっしゃった直感ということです。折口の魅力というのは、柳田の民俗学と比べて都市民俗なのです。まさに近くにそうした盛り場があって、その近くにいろいろな人が住んでいる。そういった面でもっと注目したらいいのではないかと思います。

一言だけ宣伝したいのですが、今日は夕陽のことを高橋さんも北辻さんもおっしゃっていたのですが、私は毎年天保山で夕陽を見ているのです。今年は12月30日、鶴橋に集合して、大体20人ぐらいの会ですが、もし興味があったら参加してみてください。

古代の心を実感をもって 知ろうとした折口

北辻 一言で言えば、古代人の心を知ろうということだと思のです。現代はかなりイデオロギー化していて、原点を

忘れて全て言葉にしようとするから戦争やいじめが起きる、遠因はそういうところにあるのだらうと思っています。折口信夫は明治20年生まれで、基本的には近代的な教育を受けている人です。その人が古代に寄り添い、古代のことを知りたいということで猛勉強されたと思うのですが、近代的な言葉で前近代のことを知るのなかなか難しい。だから、古代研究で言葉を尽くして、なおかつ分からないところを小説や短歌にしたり、そういう芸術的表現で分かろうとしていったと思うわけです。

そういう近代人としての悩みは今でも当然あるわけで、私もそうしたことに悩みながら、「歩いて歩いて」古代史を探検しようとしているのですが、その意味合



いで折口を読み返すことはこれからの日本を考える上でもものすごく参考になるのではないかと思います。

弘本 では最後に、高田ほのかさん、一言お願いします。

あらためて知る和歌の可能性

高田 すごく勉強になりました。SNSの時代になって、相手が何を言わんとしているのか、自分は何を言いたいのか分からなくなっていると思うのです。そういう薄い言葉がやりとりされる時代において、五七五七七の中に100文字分以上の思いを込めることができる短歌というものが、本当の心、実感を表現する文学としてまたブームが来ているわけ

です。ですから皆さんも、折口の短歌であったり、今また魅力的な歌集がたくさん出ていますので、ぜひ一度図書館な



どで読んでいただいて、そこを入り口にして心を軽くしていただけたらうれしいです。ありがとうございました。

弘本 ありがとうございます。

折口のコスモロジーが、いろいろな言葉で満たされて、おなかいっぱいになっていきますけれども、こうした場を上町台地の上で持てるのは本当に幸せなことだと思います。今日こうして日曜日の大事な時間に、日が暮れるまで語り合うことの豊かさや意味合いを改めて感じながら、皆さんのお話をお聴きしていました。

受け止め切れていないこともたくさんあるかもしれませんが、またいつかどこかで、ふと、あのとき、このことをおっしゃっていたのだなと思い起こすことができると思います。

歌を通して見えない世界に接近し、歌の言葉、学問の言葉、日常の体験的な言葉を紡ぎ合わせ、混迷の時代に求められているものに思いをはせることの大切さも実感しました。

折口信夫のおかげでこういう場が持てたことをとてもうれしく思います。本日はお集まりいただき本当にありがとうございました。フォーラムの内容はまたドキュメントにまとめて公開させていただきますので、そちらもぜひご覧ください。本当に長時間ありがとうございました。



フォーラム終了後、約1か月間、当日の録画映像を希望者への限定配信でご覧いただきました。

